

「風のことば」

星の振る夜、少女は月を見上げて手を合わせて祈った。

「どうか幸せになれるように、、、」

心の中にある宝物を探す為に少女は旅立った。
旅の始まりはいつも夢の中からだった。

白い光の向こうに小さな扉があった。何かに吸い込まれるように駆け寄ると、足元には白い砂が柔らかい風に吹かれて舞い上がっていた。その砂を両手に取り、右手の砂をポケットにしまい、左手の砂を全身にかけて、未来のドアを叩いた。時計を見ていると、午前5時をまわっていた。午前5時の森はうっすらと霧がかかっている、木の葉にはたくさんの小鳥の涙がついていた。涙が少女の手のひらの上に落ちた。水滴の中に一人の少年の姿が映っていた。少年は少女に知らない小鳥の言葉で話しかけてきた。何かに縛られているようで、その水滴の中から出たがっているのがわかった。右のポケットに詰めた砂を一握みして水滴の上に振りかけた。すると、水の殻をやぶって少年の体がみるみる大きくなった。少年は小鳥の言葉で「ありがとう」と言っているようだった。少女は小鳥の言葉を話すことができないけれど、その代わり風の言葉を話すことができた。時々、少年の言っていることがわかる時がある。それは小鳥と風が交わる瞬間だった。二人は手をつないで森の奥へ入っていった。

「君はどうしてここにいるの？」

「心の中にある宝物を探しに来たの」
少女は頬を赤くしながら、そっと答えた。

「宝物？」
少年は気になってしかたなかった。

「そう、心の中にある宝物なの。それが何だかわからないの。ところでどうしてあなたはここにいるの？」
少女は濡れている少年を見て言った。

「僕は魔法をかけられて閉じ込められていたんだ。ありがとう。僕を解放してくれて」
少年はそっと少女を抱きしめて、軽くキスをした。

少年が静かに小鳥のさえずりに耳を傾けていたら、急に強く少女の手をにぎり、森の奥へとかけていった。遠い向こうに白い光が差し込めていた。小鳥たちは虹

のありかを話していた。小鳥は白い光の下で虹が見れると話していた。少年は少女をその場所に連れて行った。少女は白い光の下で目をつぶって、風を感じてた。心に虹色の風が吹いた時、少女はゆっくりと七色の風の声に耳を傾けた。

赤い風は「心は真実を好み、本気で人を愛して」と。

青い風は「心は内なる声に耳を傾ける為に静けさを求めて」と。

オレンジの風は「心はダイナミックなものが好きだから、いつも情熱をめい一杯表現して」と。

黄色い風は「心は喜びと大の親友であるから、いつも一緒にいさせて」と。

緑の風は「心は自然の恵みを愛しているから、自由になって」と。

紫の風は「心は安らぎのつかの間を大切に」と。

虹色の風が少女にキスをして、強く抱きしめ、そのまま少女の心の中にもぐりこんだ。柔らかい光が差し込んで、少女の頬を照らし、そっとキスをした。その瞬間少女は夢の中からゆっくりと目を覚ました。

外からはゆっくりと陽がのぼり、小鳥のさえずりが聞こえた、やさしい予感のした一日の始まりだった。

「僕だけの秘密」

クリスマスが近い寒い夜、いつものように徹也は外を眺めながら、色々なことを空想するのが日課となっていました。

「お菓子の家に住むことができれば、どんなに素晴らしいだろう」

「鳥になって大空を飛ぶことができれば、そんなに気持ちいいだろう」

「体より大きいケーキを食べれたら、どんなに幸せだろう」

「徹也おやつだよ」

キッチンからお母さんの声が響いた。

「わかった、今行くから」

「わー、今日のおやつは僕の好きなショートケーキだ」

「徹也、早く食べなさい」

「はい」

しかし、徹也はフォークを持ったままケーキを食べようとはしませんでした。この小さなショートケーキはあつと言う間に食べ終わってしまう。もしもこのケーキが僕の体よりも大きかったら、一日かけても食べきれないだろうな。またしても、いつものように空想しながらケーキを眺めていました。こんな時にドラえもんがいたらどんなに良いだろうな。徹夜の空想は止まることはありませんでした。一口ショートケーキをほおぼると、口の中に甘い生クリームが広がりました。

「お母さん、サンタさんって本当にいるの？」
徹夜は目を大きく見開いて、母親に尋ねました。

「いるわよ、良い子にしている子の所だけに来るのよ？」
徹夜は母親のところに駆け寄りました。

「お母さん、何か手伝うことない？」
徹也は母親の顔を覗き込みました。

「このお皿洗ってくれる」
母親はやりかけの皿洗いの仕事を徹夜に頼みました。

「わかった。他に何かない」
徹也は急いでお皿を洗いました。

「無いわよ、徹也ありがとう」

朝起きて、外を見ると山頂にうっすらと雪が覆っていました。今日はクリスマスイブ。いつもより少し寒くて、徹也は手袋をして学校に行きました。大丈夫かな？こんなに寒いとトナカイが走ることができるかな？そりにはどれくらいのプレゼントを積むことができるのかな？僕のプレゼントもしっかり積んでくれたかな？サンタさんは僕の家がわかるかな？僕の家には煙突がないけれど、どうやってプレゼントを置いてってくれるのだろうか？こんな心配をしながら、部屋の窓を少し開けてベットにもぐりこみました。冷たい風が窓から入ってきましたが、毛布を頭までかけて、そのまま眠りにつきました。

朝、目を覚ますと一つの小さな箱が枕元にありました。何だろうと思って開けてみると、小さなショートケーキが入っていました。あまりの小さなショートケーキに泣きたい気持ちになりました。一口で終わってしまうくらい小さな小さなショートケーキでした。徹也がそのケーキをじっと見つめていると、ケーキがみるみるうちに部屋と同じくらいの大きさに膨れ上がりました。あまりにも大きくなりすぎたケーキを見て、徹也は思わず叫びました。

「お願い、これ以上大きくならないで。部屋がつぶれてしまうから」

そういった途端、ケーキはそれ以上大きくなることはありませんでしたが、その大きさと言ったらとても一日では食べきれない大きさです。

徹也は手で生クリームを口に入れました。

「わー。本物の味」

この時、徹也は初めてわかりました。これがサンタさんからの贈り物であることを。そう思いながら、ケーキをほおばりました。

それからどのくらいの時間がたったのでしょうか。食べ疲れて徹也はショートケーキの上で寝てしまい、少しして目を覚ますと、ケーキは元のままの小さなケーキに戻っていました。パジャマは生クリームがたっぷりついていました。

「徹也、どうしたそのパジャマは？」

「うん、ちょっとね。」

そう言って、徹也は生クリームのついたパジャマを脱ぎました。

これは僕とサンタさんの秘密にしておこうと思いました。